

解放運動推進フォーラム

真宗大谷派(東本願寺)解放運動推進本部

真宗大谷派が非戦・平和の声を上げ続ける、使命と意義

本年は、幾千万の尊いのちが失われた、先の戦争が終わってから70年という節目の年を迎えます。70年前、私たちは、戦争でいのちを奪い、奪われることの、悲しさ、愚かさを身をもって知ることとなりました。

しかしここ数年、特に国政では憲法改正や集団的自衛権行使容認の動きなど、安全保障の名のもとに、武力に頼る考えが強く前面に出てきています。「平和のため」という正義を振りかざし、武力を武力で押さえつけ、殺戮が繰り返される危機が迫りつつあります。このような状況下において、きちんと情報を咀嚼し、さまざまな事態に対して黙視することなく、声にして伝えていく。宗門にご縁をいただく者としてその必要を痛切に感じる機会が多くなってきました。

私たちの宗門は、明治期以降、宗祖親鸞聖人の仰せになきことを仰せとして語り、戦争に協力してきた歴史を抱えています。侵略戦争を「聖戦」と呼び、仏法の名のもとに、多くの方々を戦場へと送り出しました。そして世界の人々、とりわけアジア諸國の人たちに、計り知れない苦痛と悲しみを強いてきました。

そのような宗門全体としての責任を省みつつも、その中において非戦と平和、人と人との平等につきあえる世界の実現を心から願って活動してこられた僧侶たちがいたことにも注目しています。新宮の真宗大谷派淨泉寺の住職であった高木顕明師もその一人です。

師は、親鸞聖人の精神を生きるはどういうことか、日々の生活の中で問い合わせ模索し続けた僧侶です。日露戦争に際し非戦を唱え、公娼設置に反対し、被差別部落の門徒の痛苦に同苦しようと生活をなげうつて共に生きようとした解放運動の先達です。ところが国策に追随した宗門は、顕明師のような真摯な僧侶を宗門から追放し、その家族や門徒に大きな悲しみを強いてきました。

それから百余年の時を経た今、私たちの社会はまさに五濁悪世の様相を深めています。このようにこそ、宗門として声を出して訴えていかなければならないことがあるはずです。

今夏、宗門が主催して演劇『太平洋食堂』を上演することもそうした思いによるものです(本紙P1～P2参照)。高木顕明師をはじめとして、新宮の地で平和や自由を渴望し、敢然と生きた人々の歩みを訪ねてまいります。生きる喜びと意義を見失って苦悩する私たち現代人にとって、大いなる道しるべとなることを願っています。

解放運動推進本部長 木越 渉



高木顕明師 1910年3月

高木顕明の教団内復権という闇

長浜教区 清休寺住職 泉 惠機

高木顕明は、1864年5月21日に生まれ1914年6月24日に、秋田監獄で首をくくって自死した。

顕明は、真宗大谷派僧侶としては1880年から1911年1月18日までの約31年間を勤め、新宮の淨泉寺の住職として過ごしたのは、1899年12月～1910年11月10日までの約11年に満たない。明治のこの短い時間を僧侶、住職として、いかに生きることが親鸞の精神に生きることか、仏陀釋尊の教法に生きる道なのかと、真剣に、また不器用に模索し続けた人であった。

彼の場合その道は、いわゆる「被差別部落」の人々と共に生きむとする道であったことが、彼の新宮時代、ことに住職時代の全体を特徴づけている。彼が住職時代にやったこと、或いはやろうとしたことは、単純化して言うなら、日露戦における非戦、新宮での公娼設置に対する性の売買への批判、被差別部落の人々との共生への願いと行動の三つだった。当時において、このような願いと行動に生きることは、驚異的であること、世間からの四面楚歌は当然のことであった。が、しかし、ここは、紀州新宮なればこそ、大石誠之助、沖野岩三郎等、彼への理解と協力者がいた。このこと自体、東京や大阪ならぬ、一種の辺境の町であり、そんなに人口の多いわけではない町としては驚くべきことであったが、そこに新宮という町の特徴があったといえるだろう。

彼は、新宮のその特異性によって救われ、また死んでいったと言えるかもしれない。しかし、顕明は新宮という町を憎み、あるいは恨めしく感じたことはなかったと思う。何故なら彼は、太平洋食堂に象徴されるこの町に於て初めて、生の実感を持ち得たのだ。我々の領域の言葉で言うなら、浄土への道を見出したのだ。そういう真摯な僧侶、真摯な求道者を、国家と、国家に阿諛する大谷派は、住職を辞めさせ、さらに「擯斥」という宗門追放に処し、彼とその家族や連なる人々の未来を奪ったのだ。私は、そういう大谷派の一員として、怒りと悲しみをもって顕明の事績を辿り、顕明の宗門内復権を考え始めて約10年余りかかったが、ようやく、1996年4月1日付けて、彼の擯斥は解かれ、彼は名誉回復し、大谷派は謝罪を公表した。それは、顕明の自死から80年余になされたことだったが、大谷派教団とすれば実に「英断」だつたと思う。しかし、このことによって、大谷派の暗闇が晴れたのではない。例えば、「釋尼梅陀」はじめ差別法名の存した教団にありながら、その対極にある院号の問題への取り組みはすすめられていない。流罪以後「愚禿」を生きる名告りとされ、「熊皮の御影」を残された親鸞聖人を宗祖と仰ぎながら、自らの現状を問うことがなければ、これこそ罪業深重であろう。夜明けはまだまだあることを、いま改めて思はせられている。

（「太平洋食堂」2013年上演プログラムより）



「太平洋食堂」あらすじ

明治末期の1910年に起きた大逆事件とは、刑法第73条「皇室に対する罪」すなわち大逆罪を犯したとして大量の社会主義者らが検挙され、暗黒裁判によって多数の刑死者、獄死者を出した史上最悪の冤罪事件である。そしてその事件の経緯は幸徳秋水ら平民社の事件として語られる事が多い。この戯曲は、今まで一犠牲者とされた和歌山県新宮の大石誠之助（役名・大星誠之助）を主軸にし、明治に生きたリベラリスト達の夢と挫折を、首都から遠く離れた熊野の地を舞台に、群像劇として描いた作品である。

医師、大石誠之助は日露戦争開戦の年、「太平洋食堂」というレストランをオープンする。これは、開戦一色となった世の中に平和主義者としての抗議をつきつけ、迷信の破壊、家庭の改良を諂る思惑だった。しかし、口うるさい食事のマナー指導で客はなかなか増えず、開店休業状態となる。同じ頃、檀家に被差別部落を抱える浄泉寺の住職となった高木顕明（役名・高萩懸命）も、状況を改善しようと孤軍奮闘していた。世間の迷信、無理解、絶

対的貧困を前に悩む懸念であったが、製材所の差別問題をきっかけに誠之助とチームを組むようになり、社会主義に感化される。そして、正義を叫べば叫ぶほど新宮町内で孤立する彼らだったが、やがて多くの青年同志が集うようになる。誠之助らは、改革派の新聞、『牟婁タイムズ』支局を立ち上げ、気勢を上げる成田誠四郎らを中心にしてラヂカル社を作る。

明治41年、東京では赤旗事件が起こる。被告となった平民社の同志の裁判の為、幸徳秋水が上京の途中に新宮に滞在する。浄泉寺では幸徳を開む座談会が開かれ、そのダイレクトアクションの演説に触発された青年達は、石炭運搬船のストライキを起こし成功へと導く。

やがて明治政府の思想弾圧の強化と共に、青年達は次第に反発を強め、ラヂカル社の理想と現実も次第に乖離を始める。誠之助の抱える矛盾や葛藤も、彼らの目にくっきりと映り始める。その後、平民社の幸徳の元に現れた、長野の職工の一青年が投げた革命の直球は、それに関わる全ての人々を大嵐に巻き込んでいく。

【日 時】7月10日(金)昼12時30分～／夜18時～

7月11日(土)昼13時～

※上演時間は休憩を含み、2時間50分。各公演の昼の部の上演終了後にはアフタートークあり

[アフタートーク] 10日：早野透（桜美林大学教授）、嶽本あゆ美（作者）、他 11日：泉恵機（長浜教区清休寺住職）、嶽本あゆ美、他

【会 場】難波別院御堂会館大ホール 大阪市中央区久太郎町4-1-11（地下鉄本町駅⑩番出口、南へ徒歩3分）

【チケット】全席指定 S席 3,800円／A席 2,800円／B席 2,000円

【窓 口】チケットぴあ[TEL] 0570-02-9999 [Pコード] 443-055

カンフェティ[TEL] 0120-240-540 <http://confetti-web.com>

大阪教務所[TEL] 06-4708-6331（チケット専用）

【お問合せ】解放運動推進本部[TEL] 075-371-9247

※宗派主催大阪公演とあわせて、東京公演（7月1日～5日、座・高円寺）、新宮公演（7月19日、新宮市民会館）が各自治体の後援により上演されます。

詳しくは、太平洋食堂HP：<http://taiheiyousyokudou.com/> をご参照ください。

主催 『太平洋食堂』上演実行委員会・真宗大谷派（東本願寺）

えん しょう き 遠松忌法要 高木顕明師を想う集い ご案内

- 1 テーマ：前を訪う—今、この時代に聞く非戦・平等の願い—
- 2 日 時：2015年6月20日(土)午後2時から
- 3 会 場：大阪教区第23組浄泉寺（和歌山県新宮市大橋通り）
- 4 法 話：梶原敬一氏（真宗大谷派僧侶・姫路医療センター医師）
講 題：「地獄は一定すみかぞかし」

* 当日11時より、新宮市南谷墓地にある高木顕明師顕彰碑前にて勤行があります。

2014年度人権週間ギャラリー展 誠信交隣を願って 日朝・日韓関係の歴史と現在

2014年12月10日(水)～2015年2月2日(月)

真宗本廟参拝接待所ギャラリー

今回の人権週間ギャラリー展は、「誠信交隣を願って - 日朝・日韓関係の歴史と現在」と題して、古来より朝鮮半島と日本列島の間で続けられてきた交流の歴史を取り上げ、秀吉による二度にわたる朝鮮侵略(文禄・慶長役)を示す鼻塚(耳塚)や、「従軍僧」として動員された真宗僧侶が悲惨な戦争の状況を伝える言葉や、こうした苦難の歴史を乗り越えて江戸時代に12回も来訪された朝鮮通信使が、江戸や大坂の本願寺別院に訪問逗留した資料などを展示しました。

近代においては朝鮮半島を植民地にするという悲惨な歴史を繰り返し、大谷派もその流れの中で「海外開教」の名のもとに布教所、別院を設置したこと、ヘイトスピーチにみられる在日コリアンに対する現代の差別の資料も展示しました。

今回、本紙上で一部を再録し展示をふりかえってみたいと思います。

また1月22日宗務所議場において、関連企画としてシンポジウムが開催されました。

シンポジウムでは、本展の監修をいただいた仲尾宏氏(日朝関係史学者、京都造形芸術大学客員教授)、水野直樹氏(京都大学人文科学研究所教授、朝鮮近代史)、文公輝氏(特定非営利活動法人多民族共生人権教育センター事務局次長)の三氏をシンポジストに迎えて、古代から現代にわたる課題を各氏から提起いただきました。それぞれの提起に対して、解放運動推進本部からコメントと、参加者からの質問や意見を受けて、後半の論議につなげました。

シンポジウムのコーディネーターは、山内小夜

高徳寺、端の坊のこと



「高徳寺由緒書」 所蔵:高徳寺 唐津市

高徳寺は現在の佐賀県唐津市にある真宗大谷派の寺院です。その『由緒書』によると、織田信長の家臣であった奥村某が本能寺の変ののち、本願寺の教如上人に帰依して真宗門徒となり、海外布教を発願していたところたまたま釜山に一道場をひらくことを得た、とあります。1598年に一度帰国した際に、教如上人から「朝鮮國釜山海高徳寺常住物也」という宛書きと「親鸞聖人御影」

を賜った、とされます。豊後臼杵の安養寺慶念も慶長の役のとき釜山に上陸して、この道場をたずねています。慶念はその時のことを「御道場の御入候とうけたまハリて、たつね参りけれハ、まことに殊勝ありかたく御本尊さまをあんしんめされ、御坊さまの御下と御物語候御すかたを、つくゝとおかミ奉りて・・・」と記しています。この道場は日本軍の撤退時には閉鎖されたようですが、1601年には再興の許可があつて唐津の地に新しく道場が開かれたようです。



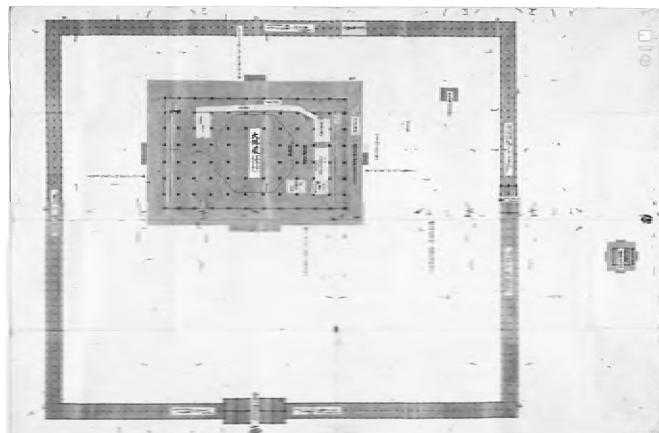
高徳寺本堂

京都大仏殿での饗応ともめ事



洛中洛外図屏風(光明寺本)部分 大仏殿と朝鮮通信使 所蔵:光明寺 岐阜市

写真提供:岐阜市歴史博物館

方広寺 大仏惣指図(大仏殿内 招宴 座席配置図)
中井家旧蔵絵図(京都府立総合料館所蔵)

江戸からの帰りの際、東山区の京都大仏殿で、対馬藩が一行をもてなすことが慣例でした。(上図参照)多くの場合、通信使一行はそれを受け入れていましたが、1719年の一行はそれを断る、と言いました。理由はその大仏殿は秀吉が発願・建立したものであり、100年が経過していても永遠の誓の願堂である大仏殿の饗応は受け入れられない、というのです。対馬藩から一行の護送役(真文役)であった雨森芳洲らの必死の説得の結果、その時の饗応はなんとか実行されたものの、次回からその行事は中止となりました。のちに芳洲は秀吉のはじめた壬辰戦争を「無名の師」「両国無数の人民を殺害」した「暴惡」であると断じています。それはこの時に苦労したことの反省がもたらした結論であったのかも知れません。

子解放運動推進本部本部委員。参加者からは、今回の展示を通して歴史に学び、その教訓からヘイトスピーチなどにおける差別の状況を具体的に転換していく作業が求められているという意見が出されていました。

期間中、ギャラリーを観覧された方に任意で感想を書いていただきました。本紙では、その中からいくつかご紹介し、展示の模様をお伝えしたいと思います。(年代→展示を知ったきっかけ→感想の順に記入)

20代 観光で立ち寄って

歴史をもう一度振り返ることによって、今行われているへ

イトスピーチがどんなに愚かな事かあらためて思いました。

50代 参拝(納骨・読経等)に来て

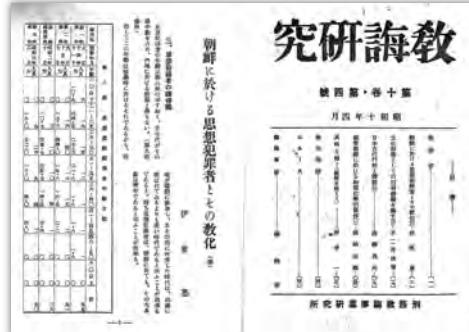
厳しい反「反日」の嵐の中で貴重な発信をしていただいたことに感謝します。ここでの近、現代の状況の把握は的確であったと思いますし、教団の姿勢も良く伺えました。ただ、では今何をするのか、どんな具体的な行動を起こすのか、連帯するのか、その部分では「教団の姿」が見えません。現実に依拠してこそその発信だと思います。期待しています。

朝鮮における監獄教誨と大谷派



現在の西大门刑務所歴史館

西大门刑務所は現在、刑務所という空間を通して朝鮮の近現代史を学ぶことのできる「西大门刑務所歴史館」になっています。



朝鮮の刑務所で教誨師を務めていた大谷派僧侶の論文
「朝鮮に於ける思想犯罪者とその教化」(『教誨研究』)

「監獄教誨」とは、刑務所・拘置所に収監されている囚人に精神的・宗教的教化を施し、罪を悔い改めさせることをいいます。日本では明治以降、主に東西本願寺が監獄教誨を担当しましたが、植民地の朝鮮や台湾における監獄教誨も東西本願寺が独占的に担当することになりました。大谷派や本願寺派にとっては、朝鮮での布教が成功しなかつた中で、監獄教誨は朝鮮の民衆に直接「教え」を伝える機会となつたといえます。

大谷派は、数多くの独立運動家が投獄されていたソウル（当時京城）の西大门刑務所をはじめとする刑務所に教誨師を派遣し、彼らに対する教化を行ないました。独立運動などの容疑で投獄された人びとに対する教誨は、日本の朝鮮支配を受け入れさせること、民族意識を捨てさせることが主な目的でした。

たとえば、1939年9月に京城南山の本願寺で開かれた大谷派教誨師・保護司協議会では、日中戦争下の朝鮮の監獄教誨において何に重点を置くかが話し合われました。その中では、朝鮮人受刑者に「日本人としての自覚」「時局認識の徹底」「肇國理想の生活化」「内鮮一体の歴史的事実の提示」「国語普及」を図るなどの意見が出されました。

70代 参拝(納骨・読経等)に来て

古代からの交流の様子のかなり詳しい資料が多く、感銘を受けました。江戸時代に10数回も通信使を受け入れて交流を深められたことを初めて知ることが出来たこともまたおどろきました深く感銘を受けました。明治時代よりの植民地化した嘆かわしい政策、何とも言えない嘆かわしい思いで一杯です。慰安婦問題・強制連行など数多くの差別があります。先人の行いを深く深く謝罪すべきと深く深く感じました。大変よかったです。ありがとうございました。

50代 新聞(毎日新聞)

ヘイトスピーチなど、今日の状況を考えると、今学ばなければならぬ内容だと強く感じました。「誠信」が今ほど求められることはないと思います。

30代 友人・知人に勧められて

朝鮮通信使のできる経緯を見て未来は変えることができる

思いました。ありがとうございました。

20代 友人・知人に勧められて ちらし・ポスター・看板を見て

真宗大谷派が、こういった問題に対して教団として関わった事実を認めた上で、声を挙げて（こういった展示なども含めて）いることに正直驚きました。歴史の上に「今」がありますが、未だ未解決なことだらけであると改めて感じました。

20代 友人・知人に勧められて

大谷派と朝鮮は密接な関係にあることに驚いた。

20代 友人・知人に勧められて

私にとって初めて目にしたことがたくさんあった。事実というのはふせられていて本当のことは自分で目を向かないといけないと思った。

20代 その他(授業の一環として)

朝鮮と日本の関係について、分かりやすく展示されていた。日

本の象徴のお寺にこういう展示があるのは、すばらしいです。
また、来たいです。

30代 その他(展示物の提供を通じて)

古代から現代まで、朝日・韓日の交流を取り上げる展示の意義はとても大きいと思いました。京都の玄関口にある東本願寺のギャラリーでされていることもあるたくさんの人が見学している姿(中国や韓国の方もおり)に、本当に素晴らしいなと思いました。秀吉の朝鮮侵略から国交回復の200年に学ぶことは大きいです。

20代 観光で立ち寄って

仲良くしようぜパレードのことは知っていたが、こうした横断幕がここにあったことに驚いた。とても嬉しくなりました。ここ

に展示してくれてありがとう。

50代 その他(インターネットの産経新聞)

この展示は、大変貴重で重要なものだと思います。外の圧力がたとえあったとしても、宗教教団の存在意義を示すものです。来年もこのような企画を待っています。

40代 新聞(毎日新聞)

大変勉強になりました。朝鮮半島との間にあったことをまだ知らないことに気づかされました。こうした問題と真剣に向き合う大谷派の姿勢にも感銘を受けました。

京都朝鮮第一初級学校襲撃事件



襲撃当時の写真

京都朝鮮第一初級学校は、京都市南区に1946年に京都七条朝聯学院として設立されました。幼稚園を併設した小学校で、100名を超える園児・児童が在籍していました。2009年12月、10年1月、3月の3回にわたり在日特権を許さない市民の会(在特会)メンバーが、園児・児童が授業中の学校を襲撃し、「スパイの子ども」「キムチくさい」などのヘイトスピーチを大音量でがなり立てました。学校側の通報をうけて駆けつけた警察は制止することなく、襲撃が続けられました。この襲撃後、園児・児童の中に、夜泣きや夜尿症が再発したり、拡声器の音に怯えるなどのPTSD(心的外傷後ストレス症候群)の症状が現れました。身体的な被害が発生している点から、この事件はヘイトスピーチ(差別煽動表現/行為)を超えたヘイトクライム(人種的憎悪にもとづく犯罪)ということができます。

ヘイトスピーチとカウンター



仲良くしようぜパレード 2014

2013年7月、大阪で1回目の「Osaka Against Racism 仲良くしようぜパレード in 大阪」(以下「仲パレ」)が開催されました。ヘイトスピーチに対するカウンターを毎週のようにおこなっていた人びとのなかで、ある在日コリアン3世の青年の「こういうの(カウンター)じゃなくて、平和の行進がしたいねん」というつぶやきがきっかけとなって企画されました。700名の参加者を得た仲パレ2013は同年、東京でも「差別撤廃東京大行進」として開催されました。2014年7月、再び大阪で仲パレ2014が「ミドウスジセレブレイトダイバーシティ」と題し、1500名が参加しておこなわれました。毎週のようにヘイトスピーチによって汚されてきた大阪の街にとって、参加者の一人ひとりが訴える人種差別反対と共生のメッセージが響きわたる、かけがえのない一日となりました。

第10回原子力問題に関する公開研修会

故郷への願い

～耳をすます・思いを馳せる～

2015年3月11日(水)

3月11日、「第10回原子力問題に関する公開研修会」が真宗本廟視聴覚ホールを会場に開催されました。各地で様々な取り組みを続けている方からのビデオメッセージを上映し、ウクライナ民族楽器・バンドゥーラ奏者のナターシャ・グジーさんを迎えたミニコンサートが行われました。震災発生時午後2時46分には、本稱寺（岩手県陸前高田市）、原町別院（福島県南相馬市）での「勿忘の鐘」の様子を中継しました。今回は、各地からのメッセージを紹介します。

初めに八幡朋行さん（仙台教区浜組正西寺候補衆徒）は、「地震や津波の被害と、原発事故の被害は一緒にできない。全く違う性質の被害が二重の苦しみとなってある」と指摘したうえで、「誰かの犠牲や苦悩の上に成り立つ社会や文化が豊かといえるのでしょうか」と訴えられました。

各地で保養事業を行っている方々からのメッセージでは、佐々木尚さん（terra ねっと福井代表）から、子どもたちが「放射能についてない?」「泥遊びしても大丈夫?」という言葉に放射能の影響を感じ、「いたたまれない思いが残ります」と話されました。三品正親・久里子さん（京都教区・福島の子ども達の一時避難受け入れの会）は、泥遊びや砂遊びをしている子どもをニコニコして見つめるお母さんの姿が非常に印象的であったことを述べられました。来山哲治さん（放射能から子どもを守る会 福岡・大分）は、災害救助法が適用されず移住ができない家族を対象に移住支援活動をしています。避難を選択した人の苦しみや悲しみを考え、最終的には避難移住を選



研修会に際して、勤行が勤められた

択した人に「あなたたちの選択でいいのですよ」と伝えたことを語られました。日野詢城さん（福島の子どもたちをわくわく湯布院ご招待 実行委員会代表 通称：「ゆふわく」実行委員会）は、「一瞬でも楽しかった時間がひとつ壁を超えるきっかけになるとすれば、「ゆふわく」は、子どもたちへのプレゼントなのかな」と話されました。

ハンセン病問題への取り組みが保養へつながったこととして、中杉隆法さん（ワクワク保養ツアー in 邑久光明園 実行委員会）は、隔離政策に大谷派が関わってきた歴史に触れ、あるお母さんの「私たち親子にとってはこの光明園がも



八幡 朋行さん

う一つの故郷です」という言葉から、かつて隔離により療養所が人を切り離していく場であったが、「人と人とをつないでいく場所に変わりつつあると思っている」と述べられました。屋猛司さん（国立療養所邑久光明園 入所者自治会会長）は、「被災者の方がホテルに泊まれなかつたなどの差別を受けたことを聞き、応援をしようと考えた。驚いたのはハンセン病に対する偏見をもつていなかつたことで、全面的な協力をしながらこれからも受け入れていきたいと思っております」と話されました。

鎌仲ひとみさん（ドキュメンタリー映画監督・映像作家・テレビ演出家）は、震災以降 Chernobyl 原発事故の被害を受けたベラルーシを取材して映画『小さき声のカノン 選択する人々』を作ったことに触れ、ベラルーシでは子どもたちを守るための取り組みが 29 年間絶えず行われてきたことを語られました。「福島を中心として放射能汚染を受けたところで暮らす人たちにどんな被害が眼に見えるようになってくるのか。被ばくは積み重なってきました。この問題に本腰を入れて末長く取り組んで子どもたちを守っていけた



屋 猛司さん



鎌仲ひとみさん

らと思います」と述べられました。

村上達也さん（茨城県東海村 前村長）は、東海村 JCO 臨海事故当時、「村民の命を守るのは私だ」と国や県の対応を待たずに避難を行いました。福島原発事故でどんなに遠いところにいったとしても、自分の帰る故郷があることで人間は生きられると初めて教えられたことを述べ、「成長、利便性、効率という価値観から転換するべきであり、真に豊かな社会を作れるかの基点は故郷にある」と話されました。そして最後に、「福島の人たちを俺たちは忘れないぞ」というメッセージを出し、原発の再稼動はさせませんよという世論を盛り上げ、福島の人たちにわかれれば励みになると思います」と語られました。

豊かな社会を望むのであれば、まず私一人が変わらなければならぬと思います。国の政策を進めた責任者が悪いとか、矛先を誰かに向ける前に。継続した取り組みを行うことで、一人ひとりの思いが多くの人々に伝わり、一人でも課題として生きる人が生まれることを願います。

（解放運動推進本部本部要員 二宮智彰）

戦後70年 - 歴史の検証と念佛者の責務 -

全戦没者追弔法会シンポジウム

2015年4月2日(木)

2015年4月2日、春の法要期間中に御影堂において全戦没者追弔法会が「戦後70年—歴史の検証と念佛者の責務—」をテーマに厳修され、鈴木徹衆氏（東京教区乗願寺前住職）による記念講演の後、午後には同じテーマでシンポジウムが開催されました。米澤鐵志氏（広島の被爆体験講話者）、郡島恒昭氏（浄土真宗本願寺派光照寺元住職）、知花昌一氏（沖縄別院衆徒・読谷村平和実行委員会）をパネリストに、コーディネーターを四衛亮氏（高山教区不遠寺住職）がつとめ、活発な議論が交わされました。

■ それぞれの戦争体験から

米澤さんは1934年生まれで、現在80歳。小学5年生のときに広島の爆心地近くで被爆しました。母親と妹さんが被爆し亡くなられたことから、「核と人類は共存できない」と核や原発の恐ろしさを訴え続けています。4年前の福島第一原発事故について触れ、事故がもう終わったことのように言われていることや、福島の子どもたちが放射線量の高い場所での生活を余儀なくされている現状、現在も毎日数百トンの汚染水が太平洋に流されていることについて、「日本の私たちの責任はとても大きい」と語られました。

郡島さんは15歳のとき陸軍に志願し、出兵した台湾で終戦を迎えるました。冒頭で「戦争中は「高座」からの説教だった」と、当時の宗教者のすがたを話されました。西本願寺では、門主（当時は「法主」）が日清戦争以降、門徒に対して「後の世は弥陀の教えにませつゝ、いのちをやすく君に捧げよ」と激励していた。それは、死んだ後は阿弥陀さんに任せて、この世は天皇や権力の側に仕えなさいという「真俗二諦」論として、子どもにも「戦争に行け」と激励していた。親鸞聖人の教えと全く違うと述べられました。

■ 沖縄戦に学ぶ

知花さんは地元の読谷村・チビチリガマ（壕）での「集団強制死（集団自決）」の調査に取り組んでこられま



米澤鐵志氏

した。「生きて虜囚の辱めを受けず」という徹底した軍国主義教育によって、壕に避難していた多くが自らの手で命を絶ち、幼い我が子に手を掛けた母親がいたことなど、多くの命が失われたことを訴えられ、「兵士だけでなく多くの住民が犠牲になった沖縄戦から生まれたのが『命どう宝（ぬちどうたから）』という教訓であり、これを守り、生かしていきたい」と述べられました。

辺野古に新しく作られようとしている基地建設現場では、現在、毎日100～150人ほどが座り込みをして、基地に依存しない新しい沖縄を作ろうと活動を続けられています。1972年に沖縄は日本に復帰しましたが、基地はそのまま存在し、また新たに作られようとしています。沖縄戦を体験した人たちの中には「戦争はまだ終わっていない」という人もいるとのことです。

■ 日本国憲法を守りたい

現在、改憲に向けた議論が活発になっている日本国憲法について、知花さんは「アジアの人々2000万人を殺し、日本人も300万人が殺されていった70年前の戦争から、私たちが教訓として得たもの、誇れる

ものは平和憲法であり、9条だ」と訴えられました。しかし今、その認識が曖昧になってきており、その危機感が今回のシンポジウムのテーマ「歴史の検証」につながっているのではないかとの指摘をされ、「戦後70年経ったが、もう一度歴史を検証しなければならない時代にきている。検証した歴史に目を見開いて、これから来る時代に向き合っていかなくてはならない」と述べられました。

■ 念仏者の責務とは

郡島さんは、「念仏をしていれば、そのうち浄土に行って仏になれるということではない」と言われます。『教行信証』後序の「主上臣下、法に背き義に違し、忿を成し怨みを結ぶ」という、親鸞聖人が後鳥羽上皇と土御門天皇を厳しく批判された文章を紹介し、「真宗門徒として聖人の教えをどう受け止めいくかが、今、私たちに問われていることではないか」と話されました。

最後に、「宗門では様々な社会問題に対して声明を出しているが、ただ出しているだけになっているのではないか」という指摘が、知花さんからなされました。「大谷派には8900の寺院があるが、お寺の中で、実際にどれだけご門徒と靖国問題や集団的自衛権などの話がされているのか。そう考えるとおぼつかない。念仏



知花昌一氏

者として平和と平等を目指しているのだから、ぶつかりながらもお寺の中で話をしていかなくてはならない。戦後70年という歴史の検証を通して、一人ひとりが課題を現場に持ち帰る。それが私たちの責務だと思う」と語られました。

■ シンポジウムを終えて

戦後70年。戦争の体験を語る方が少なくなる中で、それぞれの経験や活動、思いをお聞かせいただき貴重な機会になりました。戦争を知らない私たちは語られた経験をどう受け継いでいくのか。歴史の事実に目を見開き、沈黙するのではなく具体的な行動につなげていく。それが、戦争を経験した方の言葉を聞いた自分の責務ではないかと思い至ります。

今回のシンポジウムは、戦争の悲惨さにとどまらず、歴史の事実に向き合い、検証すること、そして私たち念仏者の果たすべき責務はどういうことなのかについて考える場になりました。私たち一人ひとりが課題を見出し、次の世代に手渡す。そこにつながる確かな歩みをしていきたいと思います。

(解放運動推進本部本部要員 近藤恵美子)



郡島恒昭氏

戦後70年の日本社会 - 戦争の記憶の風化に抗う -

第15回非戦・平和展関連学習会

2015年4月15日(水)

講師 山本宗補さん(フォトジャーナリスト)

参拝接待所ギャラリーにおいて開催された第15回非戦・平和展の中で、「戦後70年の日本社会 - 戦争の記憶の風化に抗う -」をテーマに、山本宗補さんの写真展を開催しました。

2015年4月15日、宗務所を会場に関連学習会を行い、山本さんから今回の展示についてのお話を聞きしました。

私はフリーランスのフォトジャーナリストとして約30年ほど前から仕事をしています。なぜ戦争体験者の聞き取りをするようになったのかといえば、社会問題として東南アジアなどの内戦を取材していきながら、なぜか父親の時代の日本軍が行軍した跡を歩いていた。そのことが後になって分かるんですね。そういう中で、今からでも遅くないかもしれないで、お年寄りの戦争体験をしっかり聞き取っていかないといけないと思うようになって、10年前、戦後60年のときから本格的に取材を始めたのです。

具体的にお名前を挙げていきたいと思います。小山一郎さんは、日中戦争で中国山東省の部隊に送り込まれます。まず初年兵教育で捕虜を銃剣で刺殺する。これを小山さんはやってしまうんですね。とにかく人を殺すのに、罪の意識がまるっきり自分の中にはない。それが最初の殺人になるわけです。また日本軍は中国人集落を取り囲んで、もうほとんど住民はみんな逃げていません。家にどんどん火を付けて焼き払ってしまうということを組織的にやるんですね。その一環で小山さんも命令に従って火を付けようとした。そうしたら1人のおばあさんが小屋から飛び出てきて、額をこすりつけて「助けてくれ」と。しかし上官からは残って



山本宗補さん

いる住民は殺せと言われているので、でも突き殺すのは忍びないので、おばあさんを小屋に押し戻して、ドアを閉めて家に火を付けたということです。ほとんど火付け競争のようにやっていたそうなんですね。

さらには中国人男性を組織的に捕まえて、労働者として日本に送るようにという命令を日本軍が中国の部隊に出しているんですね。あるとき捕まえた捕虜を一ヵ所のレンガ製の倉庫に入れておいて、翌日行ってみたら窒息死して約300人が亡くなっていた。日本に送り込まれるまでの間に船の中で人が亡くなっていた。

金子安次さんは、山東省に行っていました。ある古参兵が子どものいる女性を捕まえて強姦しようとしたら暴れたので、金子さんは上官の命令に従って女性を井戸に生きたまま投げ込んでしまった。その後何が起こったか。一生金子さんは忘れられない。その女性に小さな子どもがいた。その子が、どこから踏み台を持ってきて、踏み台を使って自ら井戸の中に、母親を追って飛び込んでしまった。上官は、このままでは気の毒だから手榴弾を投げ込めということで、金子さんは

井戸の中に手榴弾を投げ込んだという話があるんですね。

そういう、今思うと本当に恐ろしいことをやったんですね。こういうことは必ず、やられた方にとっては絶対に忘ることはできないはずです。やってしまった方は、自ら手を下したら、おぞましすぎて、おそらく一生懸命、無意識のうちに忘れる努力をすると思うんですね。戦後日本に帰ってきた多くの日本兵がだんまりを決め込んだ。戦争中何をやったか、兵隊だったほとんどの人は語らなかつた。

例えば、先ほどの小山さん、金子さん、この2人は熱心に、あちこちで証言活動をやっているんですよ。もし私の父親だったら、息子としたら耐えられないですよ。私の父親が中国で、ああやった、こうやった、それをあちこちで証言して歩いている。耐えられませんよね。娘さんもいるわけですよ。でも、この人たちは数少ないですけれど、そういう話をしっかりとしてきたんですよ。ありがたいんですよ。それがなければ私たちは、本当に戦後、戦争中に日本軍が何をやったのかということわからぬままなんです。

軍医だった湯浅謙さん。中国人の捕虜を生きたまま生体解剖してしまうんですね。1回だけでなくて2回、3回、命令に従って。生きたままですよ。なぜそんなことを当時やったのか。前線の日本軍の将兵がけがをしたときに手当てができるように、その訓練のために。当時、罪の意識は、まったくなかったそうです。しかも、当時の価値観として中国人を蔑視している。人間と思っていない。朝鮮人も一緒。お医者さんですよ。人のいのちを助けなければいけないんだけど、陸軍の軍医として送り込まれた陸軍病院で、そういう生体解剖を

する。自分が経験を積んだら今度は、さらに衛生兵とかに教える立場になっていく。おぞましいですよね。耳をふさぎたい話です。

慰安婦の問題については、中国とかフィリピンで、日本軍が占領していく中で組織的に女性を捕まえていて、軍の駐屯地に連行して監禁して、毎日毎晩、将兵が強姦する。これは本当に否定のできない事実なんですね。今の政権は、朝鮮半島の女性が慰安婦ではなかつたというかたちで否定したいと言っているわけですけれど、朝鮮半島は当時、日本の植民地。日本人として男性も女性も、軍隊に行くか、軍事工場に行くかというかたちで徴用される。戦争に何か協力しなければいけない中で、女性の場合は多くの人がだまされて行って、結局、工場ではない、監獄ではない、送り込まれたのが慰安所だったという話です。そこで何が問題かといえば、そこに送り込まれた女性は逃げることができたのでしょうか。逃げたら殺されただけです。軍医が定期的に女性の衛生状況を見ているわけです。衛生兵が見ているわけです。組織としてやっているわけです。逃げようがない。ですから、これは何十年たっても女性の人権侵害問題なんですね。そういうことを今の私たちの政府は、政治家は、一部のマスコミは全否定しようとしているんです。

私たちの国は新しい「日本国憲法」をつくって、国民はその第9条を受け入れ、この憲法がいかに必要かということで、みんな納得したわけですよね。ですから、憲法を簡単に一つの内閣が変えようとするということは、日本人だけでも310万人の戦死者を冒涜している以外のなにものでもないと思います。人の道にはずれることだと思います。（抄録）

戦争体験を継承するということ

敗戦から70年の節目を迎える今年、戦争経験者の高齢化によりその体験が語られることが少なくなる中、それをどう継承していくのかということが一つの課題となっている。昨年は一人のゼロ戦操縦士の人生を、その孫が探る映画が話題となった。また沖縄では、戦争体験を中高生に語り継いできた元ひめゆり学徒の方々の証言・講話が、戦争経験のない次世代の方々の手に引き継がれた。この戦争体験の継承について、誰が語る戦争体験を聞くのかが大変重要であることを、私は沖縄で教えていただいた。

沖縄の戦争体験の継承は、戦闘に参加した人だけの体験ではなく、戦闘に参加していない人々の体験も掘り起こされてきた。小さな子どもであったり、女性であったり、戦闘に参加しなかった大人たちである。沖縄開教本部が開催した第18回非戦・平和沖縄研修会では、「沖縄の戦争体験を語り継ぐ」というテーマのもと、読谷村にある「シムクガマ」とよばれる鍾乳洞に避難し生き延びた当時小学生の知花治雄さんのお話を聞いた。また同本部が隔月で発行する『ハイサイ沖縄』では、沖縄別院に参詣する人の中で、子どもとしての戦争体験を掲載してきた。

どの方も「時と場合によっては戦争も必要である」とは決して言わない。「戦争は絶対に駄目である」「どんな問題があっても戦争で解決しようとしてはならない」という固い信念が伝わってくる。それは人が人を殺していく「地上戦」を目の当たりにし、大切な人が目の前で死んでいくことを体験されたからであろう。

最近「有事」「周辺事態」などで「戦争」「戦闘」が表現されているが、いずれにしても人が人を殺していく行為であることを見失ってはいけない。戦争映画にあるような「勇敢な軍人」ばかりがそこにいたのではなく、彼らによって、その場で一人の人間として生きていこうとした民衆が巻き込まれ殺されてきたのである。この戦争体験を継承することを、70年の節目として大切にしたいと思う。

沖縄開教本部職員 長谷 嘉



「シムクガマ」での体験を証言される知花治雄さん

真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会について

来春、2016年4月19日(火)～21日(木)にかけて、第10回目となる真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会を山陽教区と共に開催予定です。会場は、姫路船場別院本徳寺(船場御坊)の本堂をメインに、2日目(20日)は邑久光明園、長島愛生園のご協力のもと、療養所に会場を移して行いたいと思っています。

2016年は、「らい予防法」が廃止されてから20年の年です。そのことをきっかけに、宗派が社会に向けて発表した「ハンセン病に関わる真宗大谷派の謝罪声明」からも、20年となります。

これまで全国交流集会は、この謝罪声明にある「病そのものとは別の、もう一つの苦しみ」をもたらしてきた教団として、隔離政策が奪った人ととのつながり、出会いを回復したいとの願いから、謝罪声明の翌年から開催されてきました。

私たちはこの20年で、療養所の内と外、つまり隔離をされた側と隔離をした側が、「ともに」解放されていく関係を本当に築いてこれたのでしょうか。この「ともに」という言葉にかけられた願いをもう一度確かめるべく、外から傍観するのではなく、その真っ只中に立って、目の前の一人の人と出会っていきたいと思います。

※詳細については、追って『真宗』誌等にてお知らせいたします。

冤罪・狭山事件と向き合う

2014年度 真宗大谷派同和関係寺院協議会 現地研修会

去る、2015年2月24日(火)～25日(水)、狭山市富士見集会所を会場に2015年度「同閑協」現地研修会、テーマ「冤罪・狭山事件と向き合う」が開催されました。

初日は、石川一雄氏と石川早智子氏からの講演がありました。一雄氏からは、自身にとって忘れることのできない刑務所での出来事と、第3次再審請求の活動報告を中心にお話がありました。死刑判決を受け、面会に来る実兄との会話を通じ「無実である」と確信した刑務官が、就務規則に反して一雄氏に文字の習得を指導され、裁判に対する言語力をあたえてくれたということでした。刑務官とは出所後も家族間での交流があり、お礼を込めてすぐにでも多くの支援者にお伝えしようと思い立たれたそうですが、「定年後に」という先方のご事情も考慮され、ようやくこのことを話す時期をむかえたということでした。刑務官と受刑者という、管理する者とされる者の構図から離れた出会いに心を打たれました。

また、夫のよき理解者である早智子氏は、映画「SAYAMA見えない手錠をはずすまで(105分)」(監督 金聖雄)が毎日映画コンクールで「ドキュメンタリー映画賞」を受賞したことについて、「受賞とともに冤罪が認められたと思った」と喜びと期待の心境を述べられました。

翌日は安田聰氏(部落解放同盟中央本部狭山事件担当事務局)によるフィールドワークがありました。寺尾判決の認定に合理的疑いがないか検査の対象となったエリアを歩き、詳細な説明を聞き確かめました。集合場所の「狭山再審闘争勝利」現地事務所には、応援に駆けつけた全国の部落解放同盟の支部からの荊冠旗がところ狭しと並べられていました。一雄氏の人間性が多くの人を突き動かしているのだと受け止めました。一雄氏の「裁判官が無罪を言い渡さないと皆さんが無実と言っても無実とならない」という言葉の重さが、深く印象に残りました。

(解放運動推進本部本部要員 吉田和豊)

解放運動特別指定伝道研修 鹿児島

鹿児島教区で、2013年度から準備を進めてきた解放運動特別指定伝道研修(以下「解放特伝」)が、2015年3月7日(土)～8日(日)、東本願寺鹿児島別院本堂・大谷会館を会場に、第1回目の研修会が開催されました。メインテーマは、教区御遠忌テーマと同様、「名告ろうよ!『私は真宗門徒です』」と確認され、新たに「解放特伝」のテーマを「時代社会の課題は信心の課題」に決定しました。

今回の「解放特伝」の大きな特色として感じるものは、受講生の選出であると思われます。受講生の総数は教区の実情と予算を勘案して30名までとしました。内訳としてはそれぞれの組(全6組)から育成員2名と推進員2名、その他別院2名、教区推薦2名としました。そして組から推薦される育成員の内1名は坊守、推進員の内1名は女性としたところ、結果として半数以上が女性の参加となり、「解放特伝」始まって以来の出来事となりました。

昨年から何度も会議を重ねて「解放特伝」実行委員会の委員(スタッフ)の役割を決めましたが、実際に第1回目の「解放特伝」を行ってみると、「何故、講師接待役は女性だけなのか?」という問い合わせが生まれ、「性差別」の問題に目が向けられ、それを忌憚のない意見として語られる姿に差別問題の学びの広がりが窺えて、今後が楽しみに思えます。

全8回の鹿児島教区での「解放特伝」。部落差別問題から始まり、ハンセン病問題や靖国問題や性差別の問題、そして死刑制度という多岐にわたる大谷派が抱えている時代社会の課題について、一年間という限られた時間の中で受講者は勿論のこと、スタッフそして教区でどのような化学変化が起きるのか。否、必ず起こることを願って互いに学びを深めていきたいと思います。

(解放運動推進本部本部委員 阪本 仁)

INFORMATION

解放運動推進本部の今年度の主な業務

★行事

- ◆「カフェあいあう」を報恩講・春の法要・春秋の彼岸会期間中に開催しました。
- ◆「2014年度真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会総会」が2014年9月11日～12日まで、大谷大学湖西キャンパスで開催されました。
- ◆2014年度人権週間ギャラリー展「誠信交隣を願って—日朝・日韓関係の歴史と現在—」を、2014年12月10日～2015年2月2日まで参拝接待所ギャラリーで開催しました。監修は仲尾宏氏（京都造形芸術大学客員教授）、水野直樹氏（京都大学人文科学研究所教授）、文公輝氏（多民族共生人権教育センター事務局次長）。2015年1月22日には、宗務所議場において監修者をシンポジストに迎え公開シンポジウムを開催しました。（本紙P3～P6参照）
- ◆第20回もちつき大会を、御影堂門前緑地帯噴水周辺において2015年1月10日に、きょうと夜まわりの会（支援の会）・のぞみの会（野宿当事者の会）と共に催し、当事者と支援者や学生ボランティアの参加を得て開催しました。
- ◆「第10回原子力問題に関する公開研修会」が、2015年3月11日に視聴覚ホールで、「故郷（ふるさと）への願い—耳をすます思いを馳せる—」をテーマに開催されました。原子力問題に関する取り組みを続けてきた方たちからのビデオメッセージが上映され、チェルノブイリ原発事故で故郷を奪われたウクライナ出身の歌手で、民族楽器バンドウーラ奏者ナターシャ・グジーさんの演奏が披露されました。（本紙P7～P8参照）また、2月4日から3月25日まで、画家小林憲明氏による東日本大震災展『ダキシメルオモイ』が、参拝接待所ギャラリーで開催されました。
- ◆2015年全戦没者追弔法会、シンポジウムが、2015年4月2日、「戦後70年—歴史の検証と念仏者の責務—」をテーマに勤修・開催されました。（本紙P9～P10参照）また第15回非戦・平和展が3月27日から4月27日まで参拝接待所ギャラリーで開催され、4月15日には関連学習会としてフォトジャーナリスト山本宗補氏からお話をお聞きしました。（本紙P11～P12参照）
- ◆第20期解放運動推進要員研修会を次のとおり開催しました。
 - ・第5回 2014年10月15日～17日
「非戦・平和と靖国問題」菱木政晴氏（同朋大学特任教授）・山内小夜子本部委員
 - ・第6回 2014年12月16日～18日
「国家と真宗」玉光順正氏（山陽教区光明寺住職）
 - ・第7回 2015年2月18日～20日
「差別問題から学ぶ大谷派教団の課題 一差別問題に照射される教学・教化」藤場俊基氏（金沢教区常讚寺住職）
 - ・第8回（予定） 2015年6月24日～26日
「これからの歩みのために 一最終レポートの攻究」

★女性室

◆「女性室公開講座」

- ・熊本会場で、2015年5月31日、「今まで何が悪い—あたりまえを問う—」をテーマに、園田久子氏（福岡県人権研究所理事・九州大谷短期大学非常勤講師等）を講師に迎え開催されました。

<編集後記>▼全戦没者追弔法会では、今の日本への危機感が語られた。4年前の福島第一原発事故について「もう終わったこと」のように言われていること、日本国憲法、とくに9条が変えられようとしている現状などである。「過去に目を閉ざす者は現在にも盲目である」という、戦後40年を迎えた際のドイツの元大統領ワッセッカー氏の言葉を思い起こす。戦争という過去を忘れようとしているかのような今の日本のすがたを言い当てているようで、胸を突く。▼戦争を体験した方々から語られた危機感。それは過去に目が見開かれていたからこそその言葉であり、同時に、過去に目を閉ざすようなあり方をしている私たちへの警鐘だと思う。私たちが受け継がなければならないのは戦争体験だけではない。過去に目を見開き現在を見据える、その眼差しではないだろうか。（近藤）

”フォーラム”(FORUM)とは、古代ローマの中央にあった大広場のことです。これは、日常の生活に欠かせない商品流通の市場として、あるいは裁判の場となったり、政治などの集会場として利用されていました。”フォーラム”には、人が集り、そこではいろいろな語り合い、ふれあいがあり、いろいろなことが論議されました。また、各地から様々な情報も集ってきました。現在では、公開された場所という意味はもちろん、世論の批判とか裁き、法廷、公開討論会、公論誌などの意味で使われています。”解放運動推進フォーラム”は、大谷派における解放運動推進を願うものにとっての、そんな情報があり論争のある、”開かれた広場”をめざしています。